

第1工学系 同窓会報

第4号(H13.1)



この3つのイラストは「火」、「手」、「水」の象形文字をもとに、エネルギー変換工学、機器設計学、熱・流体工学をイメージしています。

豊橋技術科学大学 第1工学系 同窓会

毎年恒例となりました。年頭に当たり、会長よりご挨拶申し上げます。

雑 感

会長 今泉 敏幸

(中央発條(株), 1982年3月修了, 村上・大野研究室)

謹んで新年のご挨拶申し上げます。

一昨年 = 1999 年は JCO の臨界事故や H2 ロケットの打ち上げ失敗など「技術立国の神話」が崩れさる出来事が相次ぎましたが、昨年 = 2000 年は乳製品による集団食中毒問題や自動車のリコール隠し、走行中のタイヤ破損による人身事故など、技術力だけでなく品質にも疑問符が付く出来事が相次ぎました。これらの出来事だけから日本の物作りがだめになったとは言えませんが、これまでのシステムに欠陥があったことは否めないでしょう。

関係者の人たちは今、「あるべき姿に向かって変わろう」と必至で努力しておられることでしょう。同窓生の方の中には、まさに当事者である方もおられると思います。このことが切っ掛けで将来の発展に繋がったと言える日がくることを心から願うとともに、自らの教訓にしたいと思います。

今年は 21 世紀に変わる年でもあります。21 世紀のキーワードはグローバル化であると巷では言われていますが、私の従事する業界でもグローバル化の波がひたひたと押し寄せてきています。従来は国内だけの競争であったものが、海外メーカーとの競争も意識しなければならなくなりつつあります。旧来のシステム、旧来の枠組みが大きく変化しようとしています。

「環境に合わせて、変わるものだけが生き残れる」と進化論で述べられているように、21 世紀は最初に変化できたものが優位に立てるように思われます。しづしづ変わるのではなく、「変わるって、ドキドキ」と言う気持ちが我々の未来を拓くキーワードのように思えてなりません(某社の宣伝をしている訳ではありません)。

そう言うことで、私自身も、今年は「ドキドキしながら変わること、変えること」に挑戦し始める年にしたいと思っていますが、会員の皆様はいかがでしょうか？

昨年も書きましたが、この会報は会員の方々の活躍の様子を知る上での恰好の場であります。まだ、ご投稿いただいていない会員の方々の積極なご参加をお待ち致しておりますので、宜しくお願い致します。

最後に皆様方の益々のご健勝とご活躍を祈念致します。

以下は同窓生からの寄稿文です。今回はやや少なく 6 名の方が寄稿して下さいました。原稿を頂いた順に掲載してあります。

近 況 報 告

金田 謙治

(豊田中央研究所, 1991年3月修了, 小沼研究室)

就職して今年で 10 年目になります。在学当時、(10 期生の私からみれば) 1, 2 期生の方々はかなり大昔に大学を卒業

された人という認識がありました。自分もその領域に入ってしまった—という気持ちです。後藤先生が学長に就任されたり、在学当時にお世話になった先生が他大学に移られたり、大学もかなり変わったなと思います。

私自身もこの 10 年の間に結婚・長女誕生という人生の節目となるような出来事があり、充実した日々を送っています。やはり、独身時代のように自分で玄関のカギを開け、暗い部屋に電気を点灯するより、あかりの灯った家に帰ってくるほうがいいなと実感しています(少し年寄りくさいですが)。

子供が生まれてからは、子供中心の生活になりました。会社から帰ってきて少々疲れていても、子供が寝付けずにぐずっていると抱っこをして、あやしながら寝付けます。子供の体重は 4 ヶ月で 8 *₀ になりました。毎日 8 *₀ のダンベル体操をしているようなものですが、独身時代には考えられなかったことです(会社の独身寮にいたころは、帰ってくるとごろ寝をしながらテレビを見たり、会社の同期の連中と深夜まで酒を飲んだりという生活でした。それはそれで十分楽しかったです)。おかげでほんのすこーしスマートになりつつあります。

人生 70 年と考えれば、その半分を終えたことになりません。今後の 35 年は、国の財政赤字や環境破壊など、いろんな問題が発生し、世の中の変化が大きくなると思います。その中でエネルギー工学に関わる我々に深い関係があるのは、地球温暖化の問題だと思っています。最近の新聞にこの 10 年間で、真夏日が増え、真冬日が減少した、そしてその原因として地球温暖化が考えられるという記事がありました。子供達が安心して生活できる環境を作るためにも、環境保全・温暖化阻止という観点からエネルギー工学はますます重要になると思います。今後の先生方や皆様のご活躍を期待するとともに、私自身もその一翼を担いたいと思う今日この頃です。

子育ては大変ではありますが、自分の子供時代からの人生をもう一度経験できる場所もあります。私の子供達も、大きくなるにつれて少しずつ自分達の世界を作り始めていますので、手の掛かる今の時期を楽しんで下さい(藤川記)

ア メ リ カ 雑 記

浅井 邦裕

(オーエスジー(株), 1991年3月修了, 流体工学研究室)

こんにちは。91 年修了の浅井です。思いも寄らなかった海外生活が 94 年の 6 月以来既に 6 年半を過ぎております。初めの 2 年半をニューヨーク州で過ごしました。ニューヨーク州というあのマンハッタンしか思い浮かばないかもしれませんが、そこにたどり着くまでに車で 4 時間かかる田舎の学生の町(会社のすねかじりで大学で勉強させてもらっていました)でした。その後、現在住んでいるジョージア州に移りました。ここでも、一番近い大都市アトランタまでは車で 5 時間はかかるという大田舎。アメリカでの生活、という華やかなイメージかもしれませんが、実態は得てしてこんなものです。ただこちらの道路

は大都市近郊を除けば日本の高速道の様に常に渋滞に悩まされるわけでもなく、何にも考えなくても運転出来ますので、この位の時間の運転は余り苦になりません。そう考えると、あえてごみごみしている都会に住む意味は、アメリカでは余り無いのかもしれませんが。休憩しながらでも 5 時間車で走れば 500km 以上は走れます。そんな良い道にもかかわらず道路は大抵無料 (!) な上にガソリンが日本の 1/3 以下と安いので、アメリカの人達が車でどこへでも移動するのもうなずけます。今住んでいる所は大西洋に面した東海岸ですが、ここから西海岸のロサンゼルスまでの丁度 4000km の距離も 5 日もあれば車で行けます。一度は車で大陸横断したいと思いますが、子供がいる今となつては叶わぬ夢でしょうか。

アメリカの田舎の住み心地はなかなかのものです。家から会社まで約 20km の距離ですが、大体 20 分もあれば着いてしまいます。中には約 180km の距離を毎日 2 時間掛けて車で通ってくる強者もいます。通勤の便からいったら日本とは比べ物にはならないでしょう。日常の食べ物も、日本食にこだわらなければ結構何とかなります。ただ、現地の人と同様に食べていると、体にどんどん肉が付いてきます。ちなみに私も 10kg ほど増えています。ただ不思議なのは、一般的なアメリカ人は、普段はとても質素という究極の手抜き食事です。スーパーマーケットに行けば、電子レンジにかけるだけ食べられる冷凍食品がずらりと並んでいます。アメリカ人が食べる大抵のものは冷凍になっています。実際に見た話ですが、一切れのピザとコーラだけだとか、ポテトチップスとコーラだけだとかいう場合もしばしばあるようです。学生時分に見た光景の中で強烈だったのが、晩御飯だと称して 1000ml 入りのアイスクリームのカップを丸抱えしてスプーンですくって食べている光景をみた時でした。結局、間食やおやつ、デザートがあつた様にきれいに太る秘訣のようです。デザートといえば、アメリカのケーキほどまずいものは有りません。ケーキにのっているクリームは砂糖の粒がそのまま入っているようにシャリシャリしますし、その甘さも半端ではありません。こう考えてみると、小さい時からコーラとフライドポテトで生きている(?)人達ですから、味覚の幅はかなり狭いのかもかもしれません。余談ですが、そんな食事が多いせいか、大抵のアメリカの家庭のキッチンが新品同様にきれいです。汚れるのはほとんど電子レンジとオーブンだけ。ですから日本人が住んでいる家は台所が汚い、とアメリカ人からは不思議がられるようです。こちらの家が広いのはご承知の通りですが、何が快適かといえばエアコンが建物全部に効く事です。ここは夏には気温が 40 度を超す事もあるような亜熱帯のような地域ですが、建物の中は玄関からトイレまで全部涼しく、外に出かける気になれません。驚いたのはこちらの人たちは冷房をガンガンにかける事です。だいたい冷房は 23 度くらいに設定されていて、日本人には寒いくらいです。はじめは、彼らみんな体が大きくて(脂肪の腹巻きをたくさんつけているから)汗っかきなんだな、と勝手に想像していたのですが、実

は一般的なアメリカ人は日本人よりも体温が高いという事が原因の様です。

買い物又は遠出となると田舎ですので何かと不便ではありますが。ただ遊びの方は、いま住んでいる所からフロリダのオランド迄車で 3 時間もあれば行けますので、本場のディズニーランド、ユニバーサルスタジオなどが楽しめます。夏の休暇シーズン、クリスマスシーズンなどはそれなりに混みますが、日本の混み方からすればたいしたことはないでしょう。ちなみに、私は東京ディズニーランドに行った事が無いのでどのくらい混んでいるのか分かりませんが。ユニバーサルも今年大阪にできますが、大変な混み具合になるでしょう。日本に帰る事になつても、これらのテーマパークに行く事はないかもしれません。また同じくらいの距離にケネディー宇宙センターもあります。アポロ計画時代に打ち上げられたロケットの実物大のレプリカがあつたり、運が良ければ打ち上げを待つスペースシャトルを遠くに眺める事も出来ます。一方、アトランタまで足を伸ばせば、大リーグの試合も見られます。話題のイチローはリーグが違う為見られませんが、一昨年までは野茂と吉井が同じリーグだった為、アトランタで買物をしている 2 人にサインをもらった同僚もいます。もちろんゴルフも格安です。安ければ \$30 くらいで 1 ラウンド回れます。夏時間の時には 9 時くらいまで外が明るいので、定時で会社を引き上げれば、ぎりぎり回れます。

この 6 年半で日本も大きく変わってきました。たまに日本に帰ると成田に着いた途端携帯を手にする人々にびっくりしたり、アメリカで起きたのでは? と思うような少年の起こす凶悪事件が頻発したりと、まさに浦島太郎になった気分になる時もあります。年寄りの言葉の様になってしまっていますが、Globalization という名の下に、日本人自身を見失いかけているような気がします。例えばそれこそ 2 歳にもならない子供に英語を教えて、”自転車”という前に”Bicycle”と言ったといつて親が喜んでいるのを見ると、本末転倒ではないかと心配になってしまいます。自分のルーツもしっかりと確立出来ずに外ばかり向いていても、結局すべてが中途半端になってしまい、無国籍の人間を作り出していくだけになってしまいます。こちらに居るとやはり日本に付いているいろと聞かれる事があります。しかしそのすべてに、的確に答える事が出来るわけではありません(もちろん英語できちんと説明できないという事もあります)。これでは、やはり相手からから見れば”なんだこいつは自分のルーツもろくに分からないじゃないか”という事になり、薄っぺらい奴という事だけで終わってしまいます。これからは外に目をむけていかなければならないからこそ、もっと自分というものをしっかりと確立していかなければならないのでは、あくまで言葉は Communication の手段に過ぎない、とつくづく感じます。

アメリカ人、特に女性の腰から下のあの太さは尋常ではないと、常々感じておりましたが、その理由がやっとわかりました。健康のため、肉の付け過ぎにご注意下さい。

風に吹かれて

丹羽 智明

(日本碍子株, 1984年3月修了, 大竹・吉川研究室)

高台の学舎を吹き抜ける強風に身を切られる日々から、早くも16年の歳月を重ね、自らの有り様も含めて見直す良い機会であると思い執筆させて頂く事にしました。

学生時代は、微細なダストまで実験のノイズとなるレーザー分光を応用した比較的クリーンな研究をしていた反動かどうか、卒業後10年は、主として生活排水である下水の処理分野に従事し、生物処理した後に固液分離された汚泥にまみれ、その焼却溶融プラントの建設業務を担当していました。6年ほど前から、新規事業分野に転籍となり産業廃棄物やごみに埋もれる事になり、現在は、廃棄物循環型の高度処理技術として注目されており豊橋市でも建設されているガス化溶融方式の技術開発やごみを燃料としてエネルギーの有効利用を図る固形燃料化施設、粗大ごみのリサイクル施設などのエンジニアリングを担当しています。キツイ、キタナイ、キケンな3K職場どころか、クサイまで加わった泥臭い仕事ですが、自分の性に合っていると思っています。最近では、捨てる・汚い・臭い話で困っていると聞けば何か新しい事ができるのではと、思案する様になってきました。

私が従事している仕事は、近年社会問題化しつつある廃棄物処理の分野になります。ご存知の通り所沢、豊島、豊田などに代表されるダイオキシン問題や適正処理されないままの不法投棄、大量生産消費型の社会経済活動やライフスタイルの末端で、最終処分場の建設は極めて困難な状況下であり、環境ホルモンやPCBなどの有害物質への対策など技術的な課題は山積みです。また、この分野での事業環境は数年の間で大きく変革し、まさにキョウフウに身を置く5K状況ですが、静脈産業に身を置く一技術者として、ここは一番この風力を自らの発電エネルギーに変換してこそあの技科大一系の卒業生と言わしめんと、当分は風車の如く駆け回るつもりです。

豊かな自然の中で目一杯遊びたいが故に、故大竹教授の「現状に満足しない」精神で、音速は超えない様に回転し、環境の存続にも少しでも役立つ仕事ができればと、21世紀の初頭に思いを巡らせています。

廃棄物のリサイクルは21世紀の人間社会にとって、最も重要な問題の一つです。今は5Kかもしれませんが、脚光を浴びたときにはバイオニアです。頑張ってください(藤川記)

近況報告

村田 哲彦

(NTT 東海, 1999年3月修了, 竹園研究室)

卒業して、早2年が過ぎようとしています。社会人1年目は、当然ですが何事も初めてで要領が分からず、振り返ってみると頑張っていた割には、成果の少ない1年でした。なんだか、修

士課程に入学した1年目の時と似ている気がします。そんな私も、社会人2年目になり、給料から少しずつ貯めたお金で2000年夏にハワイに1週間「ヴァカンス」に行ってきました。名古屋駅前のタワーズにあるマリオット系ホテルのスイートに泊まり、サングラスにアロハシャツ姿で左ハンドルのオープンカーに乗って、オアフ島内を遊びまわってきましたので、ご紹介します。

1日目

名古屋空港から夕方に出発。ホノルル空港に着いたら、出発した日付の朝になっていてちょっと得した気分になりました。日本語のできるホテルマンのいないホテルだったことと、お盆の時季を外していたため日本人には殆ど出会わず、海外リゾート気分を満喫しました。

2日目

レンタカーを借りて、ノースショアを目指して島を縦断します。途中日本でもお馴染みのDoleのパイナップル農場が広がり、赤茶けた土地に見渡す限りパイナップルが植えてありました。間もなく走ると、サーフィンのメッカのノースショアに着きました。しかし、写真で見ると大波など影も形もありません。後で知ったのですが、あの大波は冬のノースショアの風景なんだそうで、ちょっとガッカリしました。でも、夏はまったく波もなく遠浅なので、サーファーではなく子供連れの人が多く来ていました。

3日目

朝早くから出掛けなければ、駐車場がすぐにいっぱいになってしまうので、早起きしてハナウマ湾に出掛けました。ワイワイ騒ぐビーチではなく、まるで天然の水族館のようで、手で触れられそうな近くを色とりどりの熱帯魚がウヨウヨ泳いでいます。ゆっくりとシュノーケリングを楽しんでいると、運が良ければウミガメも回遊してくるらしいです。

4日目

日本で富士登山をするように、オアフに来たらダイヤモンドヘッド登山と言うわけで、ダイヤモンドヘッド登山に行きました。始めはなだらかですが、段々きつくなってきます。途中トンネルが有り、トンネル内は真っ暗！懐中電灯があってもちょっと怖い感じです。トンネルを抜けると次は100段ほどの急な階段が待っていて、これが最後の試練。頂上からの眺めは最高です。ワイキキからは見られない風景を目の当たりにすることができました。

5日目

ようやく日本人らしく(?)買い物ツアーに出掛けました。ショッピングモール内にはエルメスやヴィトンのショップが並び、ほとんどが日本より安い値段で売られていました。交渉次第ではさらに安くなる場合もあるので、英語に自信のある人もそうでない人も試してみたいかたがたでしょうか。

6日目 - 7日目

いよいよ帰国の日です。午前中にチェックアウトを済ませて、お昼頃の飛行機に乗りました。・・・数時間後、日本に着くと一日以上時間が経過していました。ハワイに向かう時はちょっと得した気分でしたが、帰国する時はちょっと損した気分になりました。

オアフ島だけでも1週間では、遊び尽くせません。この記事を書いていたらまた行って見たくなりました。またの機会がありましたらご紹介させていただきます。

近況報告、ありがとうございます。お仕事、レジャー共に益々旺盛に取り組んで頂きたいと思います。

技術革新とスピード

逸崎 博紀

(日本電産㈱, 1995年3月修了, 竹園研究室)

早いもので、私が技科大を卒業してから6年が過ぎようとしています。働きだしてからは時間が経つのが本当に早く、毎日の変化の連続でした。私が現在勤めている会社はハードディスクドライブ(HDD)用のモータを製造していますが、この業界は情報通信技術の発展により信じられないスピードで変化を遂げてきました。

ちょうど10年前、私が在学中に使用していたワークステーションはわずか200MBのハードディスクしか装備していませんでしたが、最近ではその百数十倍もの容量をもつHDDが家庭用のパソコンにごく当たり前に入っています。一方、装置の大きさも年々小さくなり、いまやディスクの大きさが500円玉程度のものが実用化されるようになりました。

このような技術革新の世界では、変化し続けることが当たり前で、逆に現状維持の考え方は技術の表舞台から自然と消えて行くしかありません。(まさに走りながら考えるというような感じです。)これから21世紀を迎えるにあたって、ますますその傾向は強くなっていくことでしょう。自分自身も、今後技術者としてこの流れにどこまでも食いついていけるように日々精進していきたいと考えています。

技術革新の真っ只中、第一線の技術者としてご活躍の様子がよく伝わってまいりました。今後のより一層のご活躍を期待しております。

「機械屋」として

三林 浩二

(東海大学, 1985年3月修了, 本間研究室)

mitsu@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp

早いもので、技科大を卒業して16年が経とうとしています。大学時代、4年生から修士までの3年間、本間寛臣先生のご指導のもと、一期生の柳田先生の研究を引き継ぎ、複合材料の研究をさせていただきました。本間研究室では、二期生の伊藤研

志さんをはじめ、三期生の秦さん、高坂さん、小栗さんのご指導のもと、同期の皆川君、谷君と共に、そして五期生の柴田君、小宅君、石原君、六期生の中根君、瀧原君、榎本君、蜂須賀君を道連れ(?)に、“よく学び、大変よく遊び”、楽しい時を過ごすことができました。懐かしい思い出です。さてその後、私は自動車部品会社に13年間勤めた後、1998年4月に東海大学に“バイオITの研究室”を立ち上げ、現在は「バイオエレクトロニクス&バイオインフォマティクス」の研究&教育を行っています。(残念ながら、柔道の山下先生には思ったほどは会えません。)

振り返ってみると、この16年の間に多くの経験と仕事をしました。自動車部品会社では、工場で工機設計を3年間行い、その後、会社の異業種分野への参入に伴い、27歳よりバイオの研究をはじめ、その共同研究の一環として東京大学先端科学技術研究センターにて学び、「医療用や環境用のセンサの開発」や「微生物研究」を行いました。また1995年から一年間、財団法人マイクロマシンセンターの非常勤研究員として、マイクロマシンのバイオ応用研究にも従事しました。思えば、鈴鹿高専に入学した15歳からこれまでの25年間を、前半は「機械屋」として学び・働き、そして残りの半分を「バイオを研究する機械屋」として過ごしてきたように感じます。

ご存知のとおり、バイオは20世紀後半に急速に発展した分野で、多様なバックグラウンドをもつ研究者や技術者がいます。しかし、その中でも「機械屋」で、生化学やバイオエレクトロニクスを研究している者は少なく、「機械屋としての発想や技術」が私のバイオ研究を支えてくれたことは疑う余地のないところです(もちろん恥をかいた事も数知れず)

機械屋は「ツブシが効く」と良く言われますが、「3K嫌い」から始まった昨今の「理工系離れの風潮」のなか、特に【高専技科大】という不思議な生い立ちの我々はこの時代において、稀有な存在なのかもしれません。つまり、「取り敢えず、色々やったことがある」という「現実-体験者」である我々は、コンピューター主体の「仮想-体験者」が多い今日において、少なからずアドバンテージを持っており、後進を指導する立場となった現在、特に自覚すべきことではないでしょうか。高専時代の「詰め込み授業(一日8時間はちょっと無謀)」、そして技科大での「研究重視の一貫教育」(大学院進学率:72.5%[工学系ランキング4位]、学生一人当たりの校舎面積:190.2㎡[ランキング1位]、朝日新聞社調べ、2000年)、この教育システムの中で、私たちは未消化なりにも多くのことを学び、「身を助ける術」をそれなりに体得したのかもしれません。事実、私が聞き知る範囲において、大学や企業での「高専 大学出身者」に対する評価は概ね好評で、特に大学組織では一目置かれる存在であると信じています。

現在、私の研究室でも「実験と現物」を重視し、半導体加工技術とポリマー技術を利用し、コンタクトレンズのように透明で眼部に装着できるウェアラブル糖尿病センサの研究や、

肝臓の薬物代謝酵素を用いた高感度人工嗅覚（バイオノーズ）の開発，微生物の選択的増殖制御に関する研究，そして DNA チップを超えるゲノム解析ツールの研究を精力的に進めています。また仏国 CNRS との共同研究で国際学術交流を図っています。（詳しくは，文部科学省（旧科技厅）の広報誌「科学技術ジャーナル」本年 2 月号の研究室紹介をご覧ください）

今年は私にとって 40 歳となる節目の年でもあり，いま一度，「機械屋」としての本質に立ち返り，次は「バイオを教える機械屋」として機械工学の研究に取り組み，ご無沙汰している機械学会にて発表，論文投稿できるよう，努めたいと思います。

では，またどこかでお会いしましょう。

バイオの分野で幅広く，国際的にもご活躍のようですね．機械工学分野の学会の講演会等でお会いできる日を楽しみにしております．

事務局よりお願い

会員への連絡網を強化したいと考えております。**電子メールアドレスをお持ちの方は，下記アドレスの何れかにお知らせ頂きますようお願い申し上げます。**

また，住所や勤務先等の変更の折にも必ずご一報頂くようお願い致します。**電子メールを利用しておられない方は，下記宛先に郵便でお知らせ下さい。**

1 系同窓会事務局メールアドレス

yanada@mech.tut.ac.jp

minamoto@mech.tut.ac.jp

seki@mech.tut.ac.jp

郵便用宛先

〒441-8580 豊橋市天伯町

豊橋技術科学大学 第 1 工学系同窓会 事務局

会計報告

第 1 工学系同窓会の財政状況の概略を以下に示します。

平成 13 年 1 月 10 日現在の資金総額：約 302 万円

年間収入：約 60 万円(平成 12 年実績)

年間支出：約 21 万円(平成 12 年実績)

[支出内訳] 会報印刷費：約 50 千円

会報発送費：約 135 千円

アルバイト代：約 25 千円

役員一覧

会長 今泉 敏幸（1 期，Toshiyuki.Imaizumi@chkk.co.jp）

理事 池崎 勇（1 期，ikezaki-isamu@mui.biglobe.ne.jp）

柳田 秀記（1 期，yanada@mech.tut.ac.jp）

宮本 真志（2 期，shinji_miyamoto@mail.toyota.co.jp）

秦 信一（3 期）

長野 進（3 期，e0720@mosk.tytlabs.co.jp）

感本 広文（11 期，minamoto@mech.tut.ac.jp）

関下 信正（11 期，seki@mech.tut.ac.jp）

役員交代のお知らせ

昨年，第 1 工学系同窓会の設立から丸 3 年経過したのを機に一部の役員が交代しました。副会長の藤川武敏氏(1 期)と監査の小西正則氏(1 期)がそれぞれ 3 期の長野 進氏，2 期の宮本真志氏と交代となりました。前任のお 2 人は 3 年間ご苦勞様でした。新任のお 2 人は今年度を含めて取りあえず 3 年間よろしくお願ひします。副会長などの人選は，これから役員の間で決定したいと思います。

役員の一部交代により，ほんの少しだけ役員の平均年齢が下がりましたが，まだまだ高いようです。今年も 1 本釣りで，特に 4 期から 10 期の方を狙って勧誘させて頂きたいと思いますので，お断り頂きませんようよろしくお願ひ申し上げます。

伝言板

3 期生で役員の秦 信一さん。兵庫への転勤後メールが送信できません。新メールアドレスを事務局までお知らせください。

編集後記

今回は会報作成作業開始出遅れのため，6 名の同窓生の方からしか寄稿していただくことができませんでした。次号はもっと早く取り組みたいと思いますので，ご容赦下さい。お忙しい中ご寄稿頂いた 6 名の同窓生の方々に深く感謝いたします。

私が購読している「中日新聞」の朝刊や夕刊には，相変わらず技科大の先生の研究成果がよく紹介されています。昨年は 1 系の先生も一人(畔上先生)紹介されました。大学のイメージアップに貢献しているようで，1 年次入学者の質が上がったようです。「機械」という言葉が学生に将来への安心感を与えるのか，1 年次 1 学期終了後の課程配属では成績優秀な学生が多く 1 系を希望し，身近な生産システム工学課程は何故か不人気です。

技科大が進めてきた国際交流・協力についてのこれまでの実績が認められて，「工学教育国際協力研究センター」(ひょっとしたら名前が少し違うかも)が来年度(H13 年度)新設されます。工学系ではこのようなセンターは全国で初めてです。公務員数削減の方向に向かって中，教官の定員増を伴うもので，このセンター設置には 1 系の本間先生が大いに貢献されました。

国際・・・と言えば，昨年の 12 月に修士課程に英語特別コースが開設されました。すべての講義が英語で行われます。国際交流の一層の推進とともに外国からの優秀な人材の導入が期待できます・・・が，正直言って，英会話の得意でない者には英語での講義はかなり重荷です。すでに講義は始まっており，1 系では 1 講座：北村先生，2 講座：鈴木新一先生，3 講座：本間先生が開講されています。私の出番は今年の 9 月からです。早めに講義の準備をしないと，と思いながら既に 1 年以上が過ぎていきます。

今年一年の皆様のご多幸を祈念します。

柳田秀記（同窓会事務局・会報編集担当）